会報　第102号
平成23年6月　日本教育大学協会

附属学校で大学の先生が教え，担任の先生が批評する
── 予防教育の開発における，かくも愉快で，ためになる共同 ──

山　崎　勝　之

ある日の附属小学校で・・・

三月というのに，寒い朝だ。大学の内田香奈子専任講師は，今日も３年生の教室に入っている。

始まりの挨拶が終わってほどなく，いつものように，全８時間の授業を貫くアニメ・ストーリーが始まった。子どもたちは，食い入るようにスクリーンを見つめている。教室の後ろから担任の坂田大輔教諭が，鋭くも温かいまなざしを注いでいる。

そのアニメも２，３分しか続かない。次は，子どもたちの活動だ。グループの活動からクラス全体を巻き込んでの授業が展開される。どの子どもも，我先に活動の主役に名乗りをあげる。怒濤のような授業だ。熱い。教諭は，机間巡視をしては自分のパソコンに戻り，猛烈に打ち込んでいく。

授業も終わりに近づくと，講師は子どもたちと授業を振り返り，最後のアニメ・ストーリーからまとめへ，そして授業進行ディスプレイに子どもたちの意識をつなげるシールを貼る。最後に，終わりの挨拶。

その直後，教諭は足早に職員室に戻る。ものの５分もたたないうちに戻った教諭は，２枚の紙を講師に手渡す。中には，授業の批評がびっしり。講師は，なかば驚き顔で，しかし丁重に受け取る。

寄り添う子どもたちを後に，大学の研究室に戻った内田講師。坂田教諭からの文書に吸い込まれる。微笑みながら，ときに眉間にしわを寄せながら。読み終えると，パソコンに向かって文字の連打。教諭への返事を書いているようだ。納得がいくところ，反論するところ，率直な返信が綴られる。

こうして内田講師の一日が終わり，海峡の空が暮れていく。

鳴門教育大学がやり始めたこと

これは，夢物語ではない。平成23年３月11日，あの大震災に見舞われた日の朝，附属小学校で実際に私が見た光景である。

鳴門教育大学では，昨春から新規の文部科学省概算要求事業が始まった。子どもの健康と適応，そして学業までも視野に入れた学校予防教育の開発と実践である。広く学校でこの教育を普及することを目指している。

その皮切りに，附属小中学校や鳴門市教育委員会のご援助のもと鳴門市の小中学校で，教育の開発と実践が展開された。とりわけ附属学校では，小学校３年生から中学校１年生まで全クラス（各学年３～４クラス）に，各学年14時間ほど授業を実施した。大学の予防教育科学センター側がすべての授業を実施し，学校の先生から辛口の批評を得るという，前代未聞の共同となった。

この教育は新しい予防教育である。教育の成り立ちがこれまでの学校教育とは大きく異なる。そのため，大学側と学校側の意見の衝突の連続であった。互いに得ることもあれば，互いに理解し合えないこともあった。しかし，少なからず実りを得た一年となった。

予防教育科学センターの所長である私と，今年４月にセンターに入ったばかりの研究補佐員（森優貴さん，安田小響さん）との以下の会話で，その有様とこの教育の新規性の一端をみてほしい。

共同のありがたさとむずかしさ

(森)　昨年学校に入られて，センターの新教育をされたということですが，その光なり，陰なりを教えていただけますか。

(所長) 私たちの教育，トップ・セルフ「『いのちと友情』の学校予防教育」と呼んでいますが，これを一年間，附属小中学校をはじめ複数の学校で実施させていただきました。光はなんと言っても，現場の先生がたの率直な意見を聞けたことですね。トップ・セルフは最終的に，広範囲の学校で一年中継続して実施していただくことを目指しています。現場の先生方との共同は必須になります。

そして，陰ですか・・・。なんと言っても，教育の背景となる理論面を理解していただくことに，私たちが失敗し続けたということでしょうか。今回のこの教育は科学的根拠をもって（エビデンスベースド）に行いますので，なぜそのような教育をするのか，背景を理解していただく説明がうまく行きませんでした（汗)。

(安田) それは，所長が失敗したということで，学校の先生がたの問題ではないということですね。

(所長) その通りです（苦笑)。これまでの教科を中心とする学校教育との違いが大きかったので，うまく説明ができないと理解していただけるはずがない。そのことに，最近ようやく気づきました。

(森)　附属学校との共同では，互いにためになったことがあったと思いますが・・・。

(所長) それは大いにありました。学校現場のことは学校の先生が一番よく知っておられるわけで，いろいろと子どもに接する方法を教えていただきました。また，学校の先生がたからも，こんなやり方があったんだ，と喜んでいただけたところも多々ありましたよ。

(安田) それでも，お聞きしていると，反省点の多かった一年のようですね。今年は，どのような点に気をつけて共同を展開されますか。

(所長) まず，理論的な背景は徹底的にわかりやすく伝えること。そして，子どもたちにとって圧倒的におもしろい授業をして，クラス全員を惹きつけることです。

(安田) トップ・セルフは子どもが楽しみにしている授業だと聞いていますが。

(所長) 間違いありませんが，もっと，もっと楽しく，子どもを惹きつける授業です。子どもを十分に惹きつけること，目標の達成に直結する授業になること，両方とも欠くことができません。

(森)　授業効果の評価方法もなかなかのものでしたが，まだまだですよね。

(所長) よく勉強していますね。先に言わないでくださいよ（笑)。評価は，大学が単独で考えすぎました。もっと現場の意見を取り入れ，斬新な評価にしたいですね。

こうして，今年度も共同が続く

この共同は始まったばかりである。しかし早くも，濃厚な活動の中で，多くの問題，そして発展の可能性を見せてくれている。大学と附属学校のあるべき共同の姿を模索しながら，大学がこれほどまでに学校現場の第一線に入るという，希有な軌跡がしばらく描かれる。

おこがましいが，コペルニクス的転回を完遂させようとしたガリレオの姿にこの教育の目下の姿が重なる。この拙文でも，ガリレオ著による「天文対話」の書きぶりが真似られている。

「それでもこの教育は子どもを守る」―そんな捨て台詞で終えることのない，今後の展開を望むばかりである。

(鳴門教育大学　予防教育科学教育研究センター所長)